
洋書紹介

Young Children

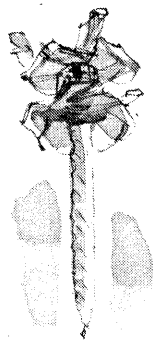
Jan, 1971

— *Who Cares for America's*

Children ? —

by *Urie Bronfenbrenner*

江波 諄 子



一九七〇年の十一月に N A E Y C (National Association for the Education of young children) の例年の会議が、東部の古い都市ボストンで開かれました。初めて幼児教育関係の全国的な会議に出てみることにした私は、そのころいたペンシルヴァニア州のステイトカレッジから、そのナースリースクールで働く人々とともに十時間余りのドライブをしてボストンについてきました。集まった人々は全国いたる所からで、その半数以上は女性のように、派手な色の服に身を包み、互いに活発に口を動かしているこの大きな集団のどよめきは、何となくこの国の幼児教育界そのものの姿を象徴しているように思われたのを、今でも覚えています。

今回は、その中行なわれた講演のひとつが翌年の一月に雑誌「Young Children」に掲載されており、ご紹介し、そういった会議の中で人々は何を言い、何を聞いたかのぞき知ることにより、私たち自身が直面している、また今後直面するであろう問題の役にたつたらと考えております。

講演者のブロンフェンブレンナー教授はコーネル大学の心理学と人間発達・家族研究科の教授で、同年に開かれた White House Conference の児童部門では議長をつとめた人です。

彼はその日のテーマを「誰がアメリカの子どもを守るか」として次のようなことを呼びかけました。以下はその中からの部

分的な拔萃です。

「アメリカの家庭とその子どもたちは問題をかかえています。その問題は大変深く、広く、われわれの国の未来に対して恐れを念をいだかせるものです。問題の根源は、全国で子どもが無視されていることにほかありません。つまり、根本的な保護が欠け、親というものの存在が無視されているのです。

われわれは、アメリカという国を子ども中心の社会と考えたかと思っっている。しかしこういっても、行動はいつも言葉と逆です。施設や日常の生活を厳しくみてみると、われわれの社会が優先しているものは、子どもでなくてほかの何かである。富を求め、物質を尊重し、人間関係に代わるものとして機械技術を喜んで受け入れ、家族を保護することもしないで単に責任のみを押しつけ、その結果犠牲がでるとそれを責める。……国家の美辞麗句はともなわず、アメリカの現実の生活のパターンの中で、家庭や子どもはいつも最後にとり残されている。われわれの社会はまず最初に市民の職業の需要がみだされているかに関心があり、次に社会の義務を果たすことである。子どもへの関心ももちろん考えられてはいるが、それは暇な時にするくらいなものである。……

今日の世界では、親は無慈悲にも社会の抑圧をうけ、子どもとおとなをより意味深い関係にするための時間や場所がゆるさ

れていない。そのために、親としての役割や機能は低下し、子どものよきガイド、友だち、仲間として親はやってあげたいこともできなくなる。この不満は貧しい家庭にことに大きく、空腹や風邪、不潔や病氣、失望などによって、人間としての基本的生活までも脅かされている。……

仕事のために、食事の時間や夜の団欒や週末までも週日と同じように使われ、人々は前進するために、いや現在を維持するために夜も外で過ごし、少しでも余った時間は社会や地域の義務のために使われる。すべてこれらのことは最低限の責務としてやらなければならぬ。子どもたちは多くの時間を自分の親よりベビーシッターと過ごすことになるのである。たとえ親が家にいる時でも、やむにやまれぬ用事などがあり、家族間のコミュニケーションは断絶される。テレビは創造的に使われれば子どもや家族の活動を豊かにするが、現在のところはむしろ害にもなっている。テレビは魔力的な文字やぞっとするような行動でもって、その魅惑が終わるまでわれわれの生活を無言の状態にしてしまう。テレビの根本的な危険性は、それが製作されたものにあるのでなく（あることはあるが）むしろそれが阻止してしまうものにある。談話やゲーム、家族のさわぎや論争などを通して、子どもはさまざまなことを学んでいき、そういうことを通して彼らの人格が形成されていくのである。テレビのス

イチを入れることにより、実は子どもを人々 (People) の中に移す過程を断ち切ってしまうのである。……

多数の要因が子どもをその他の社会から孤立させている。核家族、住宅地と商業地区の分離、近所の人々をみることもなく、小さな店が減少し、スーパーマーケットがそれに代わり、職業上の移動も増え、徒弟制が廃止され、合同学校、テレビ、電話の普及、交通も単に歩くことに代わって自動車が使われ、異なった年齢グループの社会生活のパターンが分割され、母親は働き、子どもは専門家にあずける。すべてこういった過程の徴候が、子どもが年齢の違った人々と接触する大切な機会を少なくしているのである。……

子どもたちは人間 (human) となるために人々 (people) が必要なのです。……親から子どもを孤立させてしまうということとは、同時に社会の中の個人として、その中で生きていく者としての子どもの成長を脅かしているのである。若者は自分自身をブーツのひもで引き上げることができない。ふつうは自分より年齢の上の人や下の人をみ、ともに遊び、働くことによって自分には何ができ、自分はどんな人間になれるか発見し、自分の能力や自主性をのばしていく。そしておとなや年齢のちがう子どもたちに出会い交流することによって、新しい興味や技術を修得し、耐えることの意味や協調や同情することを学んでい

く。つまり子どもを彼らだけの世界に追いやるという事は、子どもから人間性を剝奪し、同時にわれわれ自身からも人間性を奪いとしていることなのです。にもかかわらず、これが現在アメリカでおこっていることです。われわれは人間を人間らしくする過程を破壊しつつあるのです。……われわれが優先すべきものを他のどこかに決めることによって、そして子どもや家庭を最後にもつてくることにより、子どもから標準とか保護を奪い、われわれ自身の生活を貧しくこわしていく。

このように優先するものが逆になっていること、つまり子どもたちが裏切られているという事は、アメリカ社会のあらゆる面で若い人々の間に育ちつつある迷いや疎外感のものになっている。家庭や近隣社会が重要だと考えられている環境から来た人々は、彼らの不満をおおやけのサービスなどを通して肯定的な建設的な方法で解決しようとする。しかし孤立した環境から来た人々は単に自分たちのいた環境を冷淡な無責任な残酷なものとして打ちかかるだけである。異った絶望的な社会の一部で、若い人によって象徴される破壊や乱暴をわれわれは許すことができない。だが現在のわれわれの価値感が逆にならないかぎり、この崩壊していく過程は一層深い根をはりつつけるであろう。……若者の疎外感や無関心、ドラッグは急増していくであろう。そしてわれわれも子どもを憤り、若者を恐れる社会に

なっていくのである」

ここまで述べて、ブロンフェンブレンナー教授は、では一体われわれは具体的に何ができるかを語っています。彼は、大切な事はもう一度子ども自身の生活の中に人々を、そして人々の生活の中に子どもをとりもどすような生活のパターンに変えることであるといえます。「幼い子どもはわれらを導く」というイザヤのことは現代の私たちのことばに置きかえなければなりませんといえます。ソビエトやスカンジナビアでは、商業や工業の中にも子どもたちや子どものプログラムを組み入れて、そこに働く人々が子どもを知り、彼らと友だちになれるようにしていることを紹介し、教授の友人が同じような試みをデトロイト市で実行したことを語っています。

それはデトロイト市にある新聞社の仕事場の中に子どもを連れて来るのです。子どもはスラム街と中産階級の両方からで、白人も黒人もいます。最初は新聞社の人々はこの突飛な考えに教授の友人を疑ったようですが、一定の期間子どもがいた後で、いなくなってしまうたら寂しくなったと口々にいったそうです。彼はこの方法によって人々は子どもを再発見し、子どもも人々を再発見したと報告しています。

それからブロンフェンブレンナー教授は、他にどのような方法が問題解決のためにとられ得るか述べています。その中で彼

は商業、工業地域の近くやその中に保育所をつくる案を出しています。それは単に子どもを預かる場所を提供するというだけでなく、親にチャンスを与えるため、つまり中休みやお昼時に子どもたちを訪れ、話題にし、お互いに、お互いを再発見するためになるのです。彼は、企業はもともとと積極的に雇い人やその家族のことを考えなければならぬことを説いています。それから新しいタイプのテレビ番組が編成されることが是非とも必要であるといっています。その中では、みる人は単に傍観者でなく、さまざまな社会の、あるいは家庭の役割を含むようなものが望ましいのです。こわされていくのは、家族でも人々でもなく、本当は彼らに対する社会の援助なのだといえます。さらにもう一度、年上の者が幼き者にとっていかによきお手本となるか説き、その中で注意しなければならぬことは、子どもといかに長い時間を過ごすかではなく、その時間がどのように費やされたかであると、警告しています。ことに日常生活の中で母と子のやりとりは大切であるといっています。

最後に、ブロンフェンブレンナー教授は、すべて彼が今まで述べてきたことは実際に努力してやろうとした社会にのみおけるので、現実には気づき、もつと子ども、いえ人間そのものを目をむけることにより、アメリカの子どもの現在と、またアメリカという国の未来があるのだと結んでいます。